



091682-000-4

特11-51

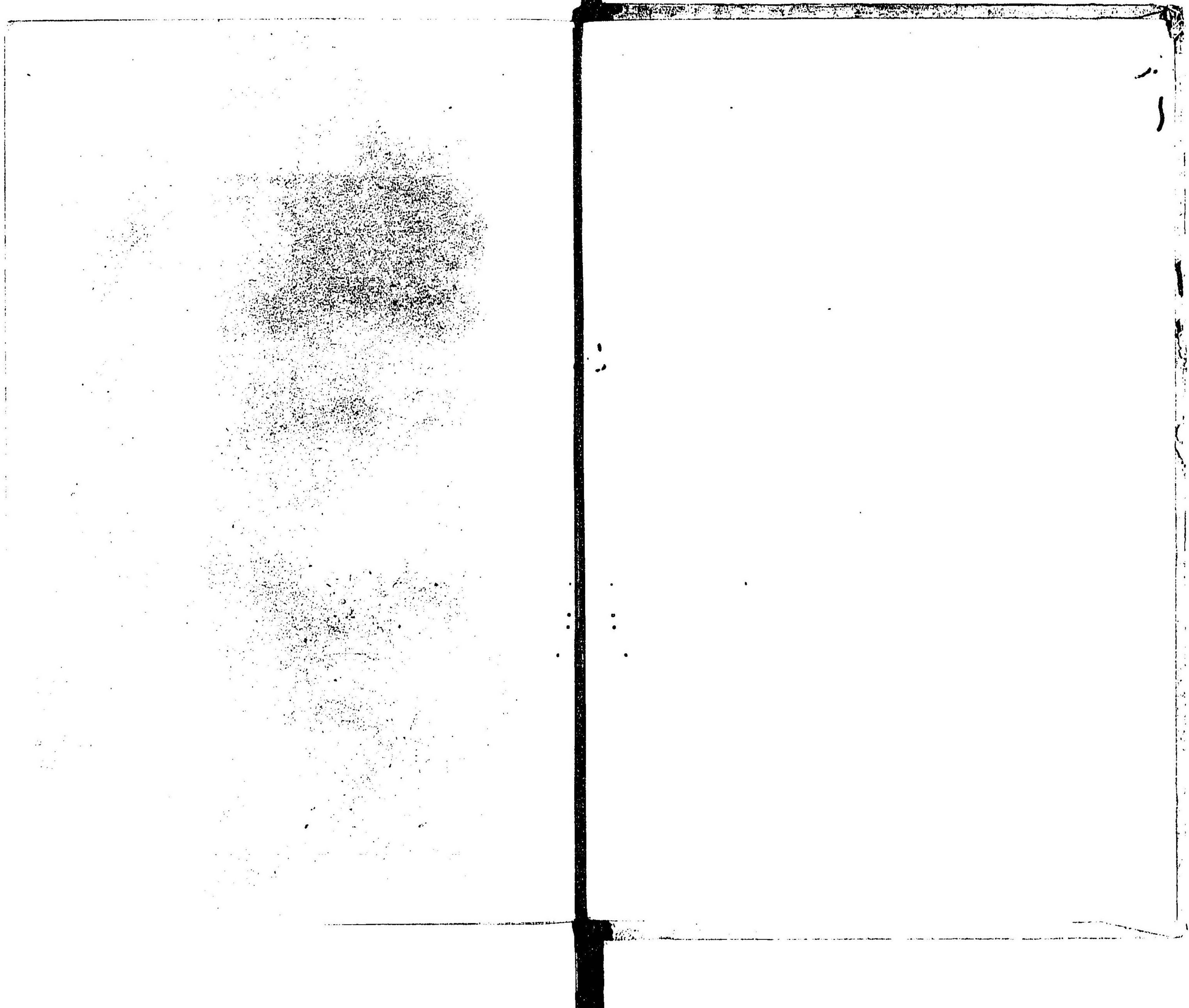
滑稽新用文章

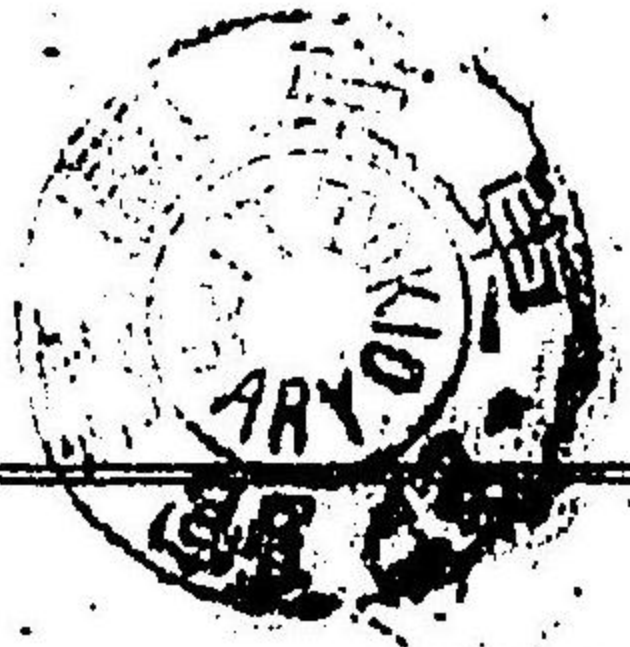
瘦々亭 骨皮道人 / 著

M23

DBO-0144

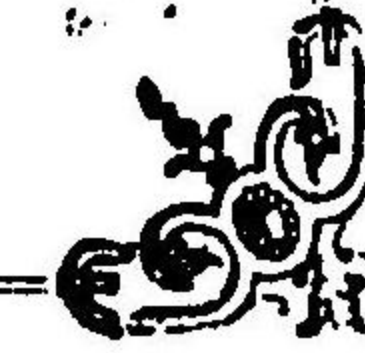
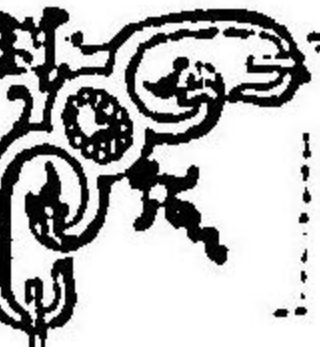
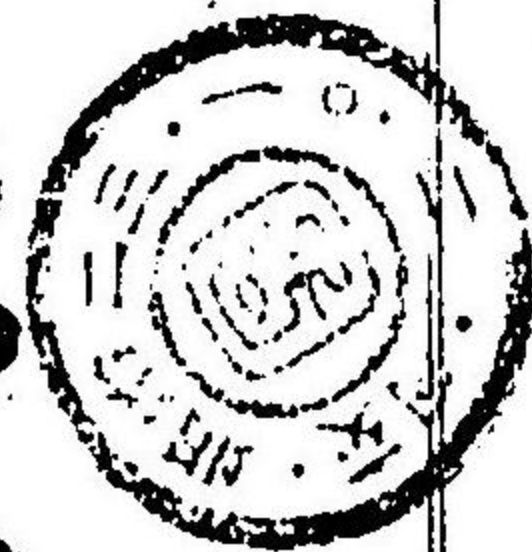






VR 5794  
23

子遊  
子好  
子成  
子語



名存之世  
名存之世

法界  
法界

福如子之  
 明如月之  
 有思道也  
 題



滑稽新用文章目錄

- 年始の文 全返事
- 茶會よ友を招く文 全
- 遊歩に誘ふ文 全
- 婚姻を賀する文 全
- 仕立物を催促する文 全
- 温泉よ行を知らせる文 全
- 勘定を取に遣る文 全

- 醫者を頼む文 全
- 引越の手傳ふ人を頼む文 全
- 出産を知らせる文 全
- 留守よ來りたる人に送る文 全
- 商業乃盛衰を問合せる文 全
- 發明品の見本を送る文 全
- 病後人に送る文 全
- 人の安否を問ふ文 全

- 物品を贈る文 全
- 頼み置し事を問合せる文 全
- 賀筵よ人を招く文 全
- 忘年会を催ふ文 全

滑稽新用文章目錄終

滑稽記事論説文目録

- 太平樂の記
- 自由堂建立の記
- 馬鹿の説
- 放屁の説
- 戀の字の説
- 焼餅論
- 似て非なるの論
- 煙草論
- 柿の辨
- 可樂の辨

- 二豎を追ふ文
- 三味線を戒むる文
- 痴情の解
- 笑ひの解
- 舞亂散史と與ふる書
- 好遊居士と答ふる書
- 賄賂先生の傳
- 平氣野平左衛門の傳
- 滄頭類語

持11  
51

滑稽用文類語

一 休和尙の歌  
よ 門松と眞土  
の 道の一里塚  
目 出度もあり  
目 出度もあし  
と 申す如く  
毎 年同じこと  
あ がら何と

滑稽新用文章

瘦々亭骨皮道人著

◎年始の文

へイ新年お目出たう御座ります昨  
年え色々お世話様になりました有  
がたう存じます今年も相變りませ  
どとは面と面とが出交した時よ云  
ふ口上の紋切形鳳曆之賀慶千里同

なく氣分春め  
きて○随分面  
白く○晦日の  
鬼も先づ追拂  
ひ○別嬪と羽  
根を突き飯鬼  
と紙薦を揚か  
○一人で盆棺  
致し居候も誠  
み氣が利かず  
候故○濁酒よ

風目出度申納候先以て貴家皆々様  
御揃ひ御超歳遊され珍重乃至に奉  
存候随て弊家儀も無異馬齡を加へ  
候ま、御安神成し下され度とは徳  
川時代の年始狀葉書の裏に恭賀新  
年の四字を書て郵便よ出すのは即  
ち當今流行する早手廻志の横着年  
詞に御坐候扱斯様に昔いから今よ

ても御持参○  
飲丈そガブガ  
ブ飲で差上候  
間○年玉の代  
りよ○お嫌で  
も有らうが○  
トと申す者の  
○破屋又籠城  
○猿鳥禰を質  
よ置ても新年  
は祝し度○今

で新年は目出度くと申候得ども  
小生え何目出度のやらサツバリ  
相分り申さず殊に千里同風など  
は何處の氣象蓋て取調たものやら  
是も何だか當に成らぬ事と存じ候  
併あがら世間の人が目出度と申す  
故小生も矢張お交際に目出度と云  
ッて新年を賀し奉り候間若し年玉



日丈之翠玉の  
緞伸し○麻上  
下之舊弊ト云  
ッて洋服之無  
し止を得ず葉  
書みて○思へ  
之馬鹿く敷い  
事ながら○是  
も世間のお災  
合○誤同様よ  
閉口頓首致し

の御支度出來致し候は、蒸返さ乃  
品よても嫌應は申さば候に付第一  
番に拙宅へ瓢床面を御出し成さる  
べく候狂惶珍言  
◎同返事  
危君儀晦日の鬼よ責られて智慧袋  
と糞袋とが轉練返しよ相成候と見  
へ素屁多女郎乃無心か下手な阿

候○汽車よ後  
押を附て迎へ  
よ御山下され  
度○嫌と云ふ  
譯よと無之候  
得ども○年玉  
と危君より先  
づ先よ頂戴致  
し度○雜談併  
みて腹を脹ら  
し○一年の事

房多羅坊主が勝質斯の熱よても浮  
された様に奇々妙々變呆來恰も蚯  
蚓が長伸出たる如く何處が頭やら  
尻尾やら頭と見當が附ぬよえ流石  
の薄識憎才かゝる僕も相困り申さ候  
夫よ引替僕かどば兩三日以前より  
握り飯を用意忘て押入の中に籠城  
を爲し借金取は言老語ら老先方よ

元日ぐわんじつも在り  
 と申候得まを心〇  
 今日こんにち丈ばかりと我われ慢まん  
 して禁酒きんしゆ致いたし  
 〇一錢せんを奢かさつ  
 て鳥追とりおを聊いし  
 居候間〇四角しやく  
 張は之先まづお廢はい  
 止しとして〇例れい  
 の通り愚傳ぐでん々々  
 々と爲なり〇先ま

り頭あたまを搔かて歸かへるやうな計略けいりやくを施ほし  
 候まをゆる自みづから精神せいしんも居場所ゐるば所ところを換かは  
 畢ま玉たまも安心あんしんしてだらり然しかと相成あひ居かり  
 候まをに付つ今朝けさはどつと風流ふうりゆうに構かまへ込こ  
 み元日ぐわんじつや餅もちでおい出すだす去年こぞ糞くそと例れい  
 乃すなは迷吟めいぎんと一句遣いひ候まを有あ様さま吳ご々々も  
 御羨ごせんみ下くださるべく候まをハツクシヨ  
 畜生ちくじやうめ先まは戯醜ぎしゆうまで笑わら々々頓首とんしゆう

〇御變報ごへんぱうまで  
 〇目出度めいでと  
 〇笑々わら香酒かうしゆ〇  
 此節このせう之是これと云  
 つて別段べつだん面黒めんくろ  
 話わしも之これなく  
 〇去きとて之又  
 〇何なんの事ことやら  
 サツパリ分わから  
 ず〇只々ただ欠伸あくしん  
 を致いたし〇別嬪べっぴん

◎茶會ちやくわいよ友ともを招まねく文ぶん

煎茶せんちや苦く御免ごめん苦く茶ちやさるべく候まを扱さ彼か茶ちや  
 も御存ごぞんじ乃すなは通り茶會ちやくわい山やまから茶ちや煮に底ぞこ  
 見みれば瓜うりや茄子かき乃すなは茶名ちやな茶ちやのりりと鼻はな  
 歌うたを謠うたふて茶ちや々々無む茶ちや苦くよ日ひを送おくり  
 茶ちやるは昔むかしの事こと當時たうじは是これと屁へ茶ちや粉こな  
 茶ちやよて加か茶ちや言こと交まりにも無む茶ちや苦く茶ちやの  
 茶話ちやわ言ことを云いはねば世よわ茶利ちやりが出來き

を呼でも来て  
と呉す○流石  
の色男も○只  
今眼を覺し○  
茶ツと御出相  
成度○嫌か應  
かの御返答○  
嫌なら強てと  
お勸め申さず  
候得とも○是  
も亦一狂○風

ぬやうな相成候を誠と賣茶意事に  
御茶候就ては和茶く共は世の中  
を茶にして和茶る主義より付意茶々  
め迂茶葉茶しの爲め今日拙茶苦に  
於て茶吞友茶痴と茶會を催ふ  
濟て茶を沸し茶苦候阿意茶若し御  
同意に御茶候は午後より御來茶  
苦茶され茶苦此段御案内申し上候

雅でもなく酒  
落でも無く○  
本の常談も○  
面白半分○欠  
伸の御暇も之  
れあり候とい  
○風流と申す  
者之喰た事之  
れなきも付○  
茶人との君の  
事よ之あるべ

茶用から

◎同返事

奇書拜見意茶候思茶らは今日御  
尊茶苦に於て茶吞の御友茶痴と茶  
會を催ふ茶れ候由よて拙茶へも出  
席意茶すべし旨御申し苦茶され有  
が茶く存じ候貴命よ思茶がひ後程  
茶ん上意茶すべく候阿意茶此段御

を呼でも来て  
と吳す○流石  
の色男も○只  
今眼を覺し○  
茶ツと御出相  
成度○嫌か應  
かの御返答○  
嫌なら強てと  
お勸め申さず  
候得とも○是  
も亦一狂○風

ぬやうな相成候え誠な賣茶意事に  
御茶候就ては和茶く共は世の申  
と茶にして和茶る主義な付意茶々  
の迂茶葉茶しの爲め今日拙茶苦に  
於て茶呑友茶痴と茶會を催ふお  
躰て茶を沸し茶苦候阿意茶若し御  
同意に御茶候は午後より御來茶  
苦茶され茶苦此段御案内申し上候

雅でもなく洒  
落でも無く○  
本の常談も○  
面白半分○欠  
伸の御暇も之  
れあり候とい  
○風流と申す  
者之喰た事之  
れなきも付○  
茶人との君の  
事よ之あるべ

茶用から

◎同返事

奇書拜見意茶候思茶らは今日御  
尊茶苦に於て茶呑の御友茶痴と茶  
會を催ふ茶れ候由にて拙茶へも出  
席意茶すべし旨御申し苦茶され有  
が茶く存じ候貴命な思茶がひ後程  
茶ん上意茶すべく候阿意茶此段御

く候 ○間拔染  
 た ○茶用よ娛  
 茶候 ○何の事  
 茶やら ○濼い  
 面をして茶ん  
 上致すべく候  
 ○上野向島の  
 櫻花もニコニ  
 コ笑ひ初め ○  
 花より團子と  
 と申しながら

笑知苦茶さるべく候 頓首茶意拜  
 ◎遊歩よ誘ふ文  
 出抜あがら一書を以て申し上候 然  
 らば此節は寒くなく熱くなく實よ  
 大極上々吉天道様よ向ッて愚痴の  
 溢志様のふい陽氣にて梅を咲たか  
 櫻は未だかいなど謠ふべき時候は  
 急只盆槍と志て破屋に潜り込居候

○餘り悪くも  
 無きゆゑ ○半  
 風子でさへも  
 上這致し ○連  
 も家よと寝轉  
 んで居られず  
 ○濁酒一升を  
 糞發して ○土  
 手をブラく  
 ○都々一を謠  
 ひながら ○美

も何となく氣の利ぬやうに存ぜら  
 れ候に付氣船氣車風船の流行する  
 と幸ひ是より運動旁日本三府四十  
 縣を始め英吉利佛蘭西は申すに及  
 ばざ五大洲中を殘る限なく遊歩よ  
 プラ付て見やうと存じ候 處貴君え  
 如何よ候哉 若し御同意よ候はゞ日  
 本銀行へ二人乃旅費を御相談の上

人の顔を眺め  
て一文無し  
なれども  
者の方で承知  
さへして呉れ  
ば○歸途吉原  
へ回り○コラ  
サノサと相論  
ひ○是が自酒  
自遊の權○人  
間の並の了簡

拙宅まで御出浮相成度此段嫌の應  
の御返事を願ひ度候也

◎同返事

大枚金貳錢の郵便切手を御糞發に  
て態々の誤紙面に付又候小遣錢の  
無心かと四嚙面を志て披見致し候  
處何ぞ馬鹿く敷毎極り切て居  
る當前の春の時候を珍し想に思は

を越され○何  
だべヲボウ臭  
い○雁が飛ば  
鳩が飛と○イ  
ヤハヤ果れ返  
ツた御了簡○  
腹の減たる時  
よと如何成さ  
る、御積り○  
何よ致せ○が  
無くてと○酒

れ難とも艱とも譯の分らふい狂氣  
染た多話を御申越相成誠に何と  
誤挨拶を申して宜やら殆ど返答に  
相困り候尤も春は萬物が生育する  
時にて三年越の梅毒もポツく頭  
と持上て出て來る時候ふれば氣君  
も例の狂印が再發致し候事と存ぜ  
られ候間早速癡癲病院へでも御入

なくを何の己  
 れが櫻かなと  
 申す通り○縦  
 ひ花之笑ッて  
 も泣ても○素  
 より風流の了  
 簡よ乏しく○  
 お茶でも上れ  
 と御断り申候  
 ○風の便よ開  
 心○友人瓢ッ

院の上ケト氣分を慥に落附られ候  
 方然るべくと存じ候間此段御返事  
 旁誤忠告致し候也

◎婚姻を賀する文

古風の文体よて申上候はゞ一筆啓  
 上仕り候と出掛べさ處だが其様小  
 六ヶ敷事は當節流行もせ老又野呂  
 突の奇殿には迎も分らぬえ必定ゆ

床童子より承  
 之り候得を○  
 鬼の女房よ鬼  
 神○牛之牛連  
 とやら○相應  
 の化物御見當  
 りよて○随分  
 奇妙頂來の誤  
 夫婦○三々九  
 度とお廢止と  
 して○極々手

急矢張當世風に這呈の二字を以て  
 前置に致し候叱らば破鍋にも綴蓋  
 とやら實に縁は異なもの味なもの  
 にて奇殿儀今般茶人の媒始に依て  
 横町のお化娘と夫婦の約束相調ひ  
 今夜愈高砂や此浦船に帆を揚ての  
 誤醜儀有之候由お目出度と申し度  
 が定めお情無い事に之あるべく

輕よ引張込  
れ候由○實以  
て驚入候○氣  
の小さな者  
を廻し○御自  
分丈目出度と  
御喜びの由○  
練味憎臭いの  
も亦た一興よ  
之あるべく○  
瓜核顔でと無

と推察致候  
舞の験まで  
包進呈致し  
て目を廻され  
候は、戯悦之  
古釘の箱の中  
る様か御手紙  
◎同返事  
鹿尾藻が喧嘩  
御用ゐ下され  
候は、戯悦之  
舞の験まで  
包進呈致し  
て目を廻され  
候は、戯悦之  
古釘の箱の中  
る様か御手紙  
◎同返事  
鹿尾藻が喧嘩  
御用ゐ下され

くて南瓜面○  
併しなから素  
知らぬ顔をし  
て居られぬ故  
○人の疝氣を  
寸白み病み○  
口から出任せ  
出放題を御申  
越○實よか臍  
が暇あ茶を  
洗して御目よ

て拾ひ讀致候  
般出雲の神の  
取持よて日頃  
じ参らせ居候  
約相整ひ候處  
半分よ悪垂口  
腹絶倒お茶ん  
座候就ては右  
て拾ひ讀致候  
般出雲の神の  
取持よて日頃  
じ参らせ居候  
約相整ひ候處  
半分よ悪垂口  
腹絶倒お茶ん  
座候就ては右



掛度○エヘン  
 憚りながら○  
 自分の女房を  
 自慢する儀よ  
 之無く候得  
 ども○危君の  
 山の神よ比べ  
 れば丸で雪と  
 黒太陽ほどの  
 大違ひ○女房  
 と壘と之新し

旁今夜大祝宴を相聞さ貧民救助の  
 氣取にて年箇年中ガツくして居  
 る餓鬼的等に施し酒を振舞度候間  
 何事も投遣にいて骨湯ても吸よ御  
 出相成度此段ホンの義理合て據ろ  
 無く誤案内申し上候也

◎仕立物を催促する文

過日悴凡太郎に持させ差上候染ッ

いのが宜敷○  
 悔しけれを僕  
 の真似をして  
 見さッしやれ  
 ○祝物を澤山  
 よ御持参の上  
 ○ランプ頭を  
 光らかして御  
 出下され度○  
 か嫌なら来て  
 貴と無くても

返しの單物并破れ襦袢繕ひの儀  
 遠くの昔よ御仕立下され候事と  
 存じ居候處今日只今まで何の氣振  
 も之なく寶は此暑さよ向ッて布子  
 を着て居候ゆゑ逢人毎よ皆瘧ても  
 震て居るめと見舞を云ふ乃みさら  
 之を着て居る當人は誠に暑くて  
 左かむら脊中よ炬燵を背負て居る

宣敷○先夜大  
 風呂敷一脊  
 負○繼縄を取  
 集めて持させ  
 候○尤も少馬  
 鹿の小僧どん  
 よ相渡し○先  
 嗣も何も無  
 しよ寒く相成  
 ○夫りや聞へ  
 ませぬ天冠様

やうも苦しみ御坐候間何卒大至  
 急よ出来致し候様御取計ひ下され  
 度猶至急の事よ参らば候はゞ他家  
 の分よても暫時の間代りに御遣し  
 下され度此段御様子相伺ひ候也

◎同返事

忘人の單物并びよ襦袢等手前宅へ  
 仕立よ御遣し相成候様御申し越の

と申しても天  
 道様之知らぬ  
 顔の半兵衛さ  
 んよて○殆ん  
 せ當わく○只  
 々頭を掻き○  
 半風子の卵丈  
 と貴家へ御残  
 し置き○若し  
 や質よでも置  
 れてと大變ゆ

處夫は何月何日何時頃の事に御坐  
 候哉左様な品は切ッ端も御預り申  
 せし覺へ更に之ふく大方夢にても  
 御覽成されし事と存じ奉り候尤も  
 兩三日前去人より聞及び候には御  
 子息凡太君が親父さんの着物を質  
 よ置いて焼芋を買て食れ候やうチラ  
 と耳よ遣入候よ付能々面を洗ッて

ゑ○手足の動  
 又差支ない様  
 御注意○細の  
 繕ひ見たやう  
 な物を御遣え  
 しまて○中々  
 チヨツクラ一  
 寸の事よと參  
 り難く○職人  
 も鼻を撮み○  
 兎角尖掛物よ

御吟味相成度凡太さんより口塞ぎ  
 を貰はざる故此段御返事旁云告口  
 を致し候也

◎温泉より行を知らせる文  
 冬は寒いも乃夏は熱いものとは鼻  
 垂餓鬼乃頃より吞込て居あがら此  
 兩三日のやうに暑くては丸て火事  
 場の手傳に参りたる有様に實に

相成○賃錢と  
 引替よ○先分  
 も御遣し無之  
 て○只働い  
 て何分よも  
 割合す○品  
 物と物置よ放  
 り込み置候○  
 半風子と其儘  
 返上致し候○  
 此節と寒暖計

閉口致し候依て小子え此暑氣を避  
 んが爲め愛婦二三名を召連明日よ  
 り箱根の温泉へ参り少し涼風が立  
 て差向ひの小鍋立が出来るまで同  
 地に怠在致し候間一寸此事を君に  
 聞せて涎を流させ候尤も自家のラ  
 ンプ親父には極内に付素知ぬ顔に  
 願ひ度候也

も九十度以上  
 ○金のある者  
 と兎角もチツ  
 として居られ  
 老○人間の浦  
 焼が出来てと  
 大變と存じ○  
 彼婦もも勘ら  
 れ○餘り悪い  
 事でも無きゆ  
 ゑ○明早朝親

●同返事

貴命の如く此節の暑きは素敵滅法  
 界よて唯莞爾附て居は氷屋の亭主  
 ばかりと實に御同様困却の至に御  
 坐候夫に付戯兄よは何處からドウ  
 胡麻化子て金蔓を見付られ候にや  
 昔一化物乃木塲たり一箱根の温泉  
 へノユくサイくと御出掛成さ

父の寝て居る  
 中よ○手よ手  
 を取て道行振  
 り出掛度○此  
 旨一寸御通痴  
 ○指を咬へて  
 御覽下され度  
 ○貴殿儀財布  
 の腹を下し○  
 夜逃同様よ○  
 温泉場の下足

れ候由愛婦を召連とえ虚言よきた  
 處が兎に角翠玉の皺伸一を成され  
 る丈は羨敷存じ候併一ランブ親父  
 よ極内とあれば思ひ切た命の洗濯  
 は連も出来難くえ候得ども此處が  
 一ツ乃附込處鉄ケ嶽乃假聲では無  
 けれど魚心あれば水心ありと云ふ  
 事を御考へ之あり度候也

番よ○梅毒の  
御養生○鼻の  
落ない中よ御  
養生と近頃感  
心○序よ四國  
八十八ヶ所も  
御巡りよて  
如何○足が立  
なくてと覺ゆ  
る○若し小遣  
錢が無くなれ

◎勘定を取に遣文  
這呈昨夜は首尾能事の見事よお振  
られ成され氣の利ふい廻一床よ眼  
玉ばかりバチクリくして屁暮歌  
人が當よならふい時鳥の聲を待や  
うな哀れ果敢あき有様にて夜を明  
されしゆゑ今日は定め一眠氣と強  
腹と悔敷と悲一いとが合併して五

を乞食の親分  
よ御依頼の上  
○聊か御餞別  
の印まで又極  
と箸を進呈○  
無縁佛よ成ら  
ぬ様御用心○  
七面倒ながら  
一書を讀かせ  
候○勿体なく  
も炭自筆を以

臟六腑がムシヤクシヤ致志候事と  
察一奉り候扱其五臟六腑がムシヤ  
クシヤする處へ斯様な誤催促致志  
候得ば猶更火事場へ石炭油を擔ぎ  
込が如く一層強腹と悔敷との火の  
手を相増した腹の虫よ對しては甚  
以てお氣文字様の儀にえ候得ども  
併し振られて歸る果報者と云ふ古

て申し入候  
過日蕎麥店  
て腹を脹ら  
し○天歎羅  
立食ひ○吉  
よて珍々鴨  
樂み致し候  
定めし泣面  
蜂が整やう  
思これ○誠  
岡目から見て

人の負惜みも御座候ゆゑ振られた  
るは出来合の木偶の坊故り出来  
合の木偶乃坊は親父の製造方が損  
財の故かりと御断念の上豫て御約  
定の頭割勘定金意痴圓重娛錢だけ  
そ今日只今此者へ御渡じ下され度  
登樓費迷算書相添此段得貴意候也

◎同返事

も氣の毒○併  
しながら苦と  
樂の種○小理  
屈を並べる場  
合よと之あく  
○其節の頭割  
勘定○一人前  
十三錢五厘  
當り○貴君と  
二人前バク附  
れ候ふ付割前

豚尾坊主の寐言を筆記したやうな  
手紙を御遣いに付片ツ端から讀下  
し候處今業平今時次郎今權八今丹  
次郎とも云はれ色男の國會なら無  
論戯長よ當撰せらるゝと云ふ保  
付の色男を木偶の坊ゆゑ振られた  
杯とは實以て片腹痛を譯よて何處  
ぞドウ推ば其様な音が出る物かと

も二人前御出  
 金〇先方より  
 度々吐鳴こみ  
 〇母親も八ヶ  
 間敷小言を云  
 て相困り候間  
 〇平生の御懇  
 意と御懇意勘  
 定と勘定〇例  
 の食逃と眞平  
 御返を蒙り度

赤ン坊が手遊物の護謨人形を見る  
 やうに甚だ合点が参り難く候併  
 是は危君が自分の腹の中を淡泊  
 打明られ候事と認定致し候は、却  
 てお不便な存候ソユて肝心な〇印  
 の儀は頭割處ではな、僕が色男の  
 資格を以てする時、僕の方に於て  
 悉皆出金致し候ても宜敷候得ども

〇耳を揃へて  
 右から左へ御  
 渡し〇泡只敷  
 何の御用かと  
 存じ候へば又  
 々々誤催促〇勘  
 定の亡者様と執  
 つかれた様と  
 〇彼の一件と  
 危兄の御馳走  
 と存じ居候處  
 〇出拔し頭割

實は歸宅後未だ母親を口説て臍線  
 を引張出せるの寸暇を得、只何と  
 なく機嫌を取て仕打て欺きて居る  
 最中、付何れ瞞着次第、僕より持参  
 致すべく候間、先夫までは何よも云  
 は、是當にせ、ぞして御待下さるべく  
 候也、頭首再這

◎ 醫者を頼む文

を食ひ○十年  
ほと前よと可  
なりよ小金も  
持て居り候得  
とも○御存じ  
の通り素寒食  
○越中御も  
屋の籠へ轉居  
致し○昨晩よ  
り度々雪院へ  
這入て相考へ  
候得とも○食

斂醫者殿に頭を下て頼むのは誠に  
強腹な事ながら用事のある時は仕  
方なき事故手紙一本差出候然らば  
昨夜手前共の神様の佛壇へ猫が犬  
の糞を垂候ゆゑ此奴悪い奴だと存  
じ矢庭よ半弓乃鉄砲を振り回して只  
一捻りに踏殺して吳んと追駈候處  
流石を鳥類だけあつて堀を越て泳

て仕舞たあし  
故何とも致し  
方之れ無く○  
無い物を出せ  
とと子ト無理  
よと御座なく  
候哉○百圓札  
みて差上候間  
九十九圓九十  
二錢五厘のつ  
り錢御持參下  
され度候○待

て逃るの際馳の屁を放掛られ身体  
一面真黄色よ相成殆ど屁功致し候  
間後學の爲め一寸御來診の上命よ  
別條のまい薬を頂戴致し度此段屁  
突張て願ひ奉り候也  
◎同返事  
楨書這見致し候然れば奇君儀昨夜  
屁間を働る馳よ屁を放掛られて御



ついでにモウ  
 三百六十五日  
 だけ御待下さ  
 れ度候○病人  
 あがら鉢巻し  
 て申上候○頭  
 痛と腹痛と足  
 痛と合併にて  
 ○昨夜鰻の井  
 を三杯と天麩  
 羅を十人前相  
 食し候處○妙

困りの由成程奇君の如き澁紙色の  
 身体へ屁の上塗をすれば餘程妙か  
 物にて定めし一種飛離れた五色外  
 の色艶が出来候事と存ぜられ  
 候然る處豫て譏笑痴の通り清盛さ  
 んは屁の病と申す如く馳の最期屁  
 を放掛られたるえ如何なる迷醫に  
 ても鼻を撮て逃るゆゑ迪も屁瘻は

な行張づくよ  
 て馬肉と五斤  
 食し○胃袋が  
 破れさうよ相  
 成候間○只今  
 くと云とす  
 よ直様御出下  
 され度○外の  
 醫者よ掛ると  
 藥代を取れ候  
 ゆゑ○仕方な  
 し籤印とと承

覺束おきのみふらだ奇君は全体面  
 の皮の厚い質にて何程薬を差上候  
 ても是までよ藥代診察料としては目  
 腐錢一文も御遣し相成候事更に之  
 なく醫者よとて薬を口ハて吞れて  
 は何とも醫者仕方なきに付屁々拜  
 々と參上致し兼候間是より君の名  
 と屁氣野屁左衛門と御改め其屁色

知しながら御診察を願候○暇を時ならオイソレと參上致すべく候得とも○此節と橙の色の青い時節よて○立關よと病人が山のやうに參り居り○此方へ行ねを米櫃

のまゝ御暮し相成候方却つて人の目に附て一際可笑い敷い屁いと存じ候に付此段御屁へん事わ旁わ申し進じ候也

◎引越の手傳に人を頼む文

大至意使を以て申し上候然らば余輩が是まで住居致し居候破屋は御存じの通り雨降よは傘が無ければ起臥も出来ぬ天氣の日は頭へ日除

又關係いたし候故○馬鹿を相手よしして居る暇之れなく○生憎馬鹿も附る薬を持合はせず○薬を吞のすも辛抱を成さすも候もとい後腹はが痛ますも併し一寸面を出し

と被らねば坐つて居られぬ様も有様殊に疊はボロくに腐れて居候ゆゑ蛆虫と蚯蚓が毎日大威張て相撲を取つて居るもどは殆ど化物屋敷同様の家に候得もと折角人間が住居する爲に建てある家を空しく明家に志して置きのも勿体ない事と存じ實は家主を可哀想と思つて今日まで

○醫者意笑痴  
○尤も藥代と  
前金も頂戴致  
し度○外の簾  
醫も御笑談然  
るべくと存じ  
候○笑法の都  
合もより○何  
分もも槍持の  
雪院見たやう  
よて○借金取  
が来ても隠れ

辛抱致し候處元來家主の兀頭は恩  
知らざの大馬鹿者と見へ斯様な恩  
人の余輩に向つて家賃の催促を致  
し候もと言語同斷不埒千萬の奴と  
存し平生お心好と評判を取て居る  
余輩も最早勘辨致し難きに付今夜  
家主に知れぬ様ユツソリと轉居致  
し度候處此節の物價騰貴にて腹一

場所之なく○  
夜之睡をつけ  
た有様○向ふ  
で之狂人が吐  
鳴隣りでと夜  
晝の夫婦喧嘩  
○鷹の目をし  
て方々を探し  
候處○間口一  
間興行三尺よ  
て○家賃も案  
外よ安く尤も

杯に飯を食は候より諸道具の取片  
附からびよ持運び等に困却致し候  
就ては貴君は随分馬鹿力のある人  
よて此稼ふ時には至極適當の役割  
と存じ候間自分の飯を食て來て十  
分御働き下され度此段御都合の程  
相伺ひ候也

◎同返事

拂と無ければ  
高くとも宜敷  
候得とも同敷  
し事なら裏店  
も氣が利かず  
○女房も八釜  
敷責られ○殊  
よ吉原へも近  
し○一寸人の  
氣の附ぬ處○  
隣が鍛冶屋も  
て火の世話な

鬼兄儀今般家主より店立を食ひ候  
より家主に極内て何處へかスツポ  
扱を成され候由にて小子へ手傳の  
儀御申越相成候處全体引越の手傳  
を頼むなど、は人間らしい人間の  
云ふ事にて鬼兄の如く欠茶碗と箸  
一本を袂へ入て行ば夫と濟やうふ  
貧的の云ふべさ文句よは之なく殊

く○愈明日線  
出す事よ決定  
○何せ貴君と  
ノラクラと遊  
んで居られ候  
故○腹ごなし  
よ御働さ下さ  
れ度○但し辨  
當之御持参の  
事○又候此度  
御移轉○丸で  
蝸牛のやうよ

に其様劍呑な首縊の細なる様な  
手傳には逆も参り難く候間此段肩  
よ八を寄てピタリと御断り申上  
候也  
◎出産を知らせる文  
山の神儀豫て誤笑痴の通り飴細工  
の狸然たる脹れッ腹を抱へ毎日肩  
で息をしてウンスくと迂鳴居り

○年々幾度と  
 ちく○此度の  
 處と場末の裏  
 店ゆゑ○蚊  
 よ整れて面を  
 四階るのも御  
 一興○裏店へ  
 スッコンで沈  
 香も焚き尻も  
 放らす○手傳  
 んと及をす自  
 分で背負て○

候處昨夜とりあげ婆アが杖を突て  
 來のも間に合ぬ位何の造作もなく  
 徴兵の玉子を放出し母親は達者に  
 て茶漬から五郎八茶碗で七八杯も  
 引ひけ赤ン坊は赤ン坊らしく威勢  
 よくオギヤアくと泣て居り候間  
 此段取敢て御知らせ申し上候尤も  
 祝物は成べく上等の品を御遣し下

され度候也。

◎同返事

餘計な暇潰し  
 は真平く○  
 高い米を食て  
 居る事を御考  
 へ之あり度候  
 ○僕の美細君  
 儀○僕が昨夜  
 愛妾の處へ行  
 し留守中○久  
 しく布袋腹を  
 抱へ居候處○  
 威勢よく破裂

承はり候得ば山の神殿儀額も波を  
 寄せ胡麻鹽を振掛たやうか頭を  
 あがら恥しとも思はせ又候借金  
 卵を御殖し成され候由是までの例  
 よ依て考ふるよ今度の赤ン坊も定  
 めし黒狸と洋犬との間に出来たや

し○玉の如き  
 然も男子○産  
 婆も臍を潰し  
 ○女房の鼻も  
 高く○此段自  
 慢して大威張  
 で○誤呆痴○  
 疾通知○鬼の  
 やうな山の神  
 よ不似合○人  
 間の子を御ひ  
 り出し○處が

うも化物に可有之を推察致し候就  
 ては何の御祝ひの驗に進上致し度  
 と色々相考へ候得ども何分も野  
 郎相當の品之なく候は付何の考へ  
 の附次第二三年の中は必ら持  
 参致すべく候間先夫まで安戯樂閑  
 として御待下さるべく候也

◎留守より來りし人より送る文

鷹を産と此  
 事よ之あるべ  
 く○定し黒ン  
 坊よ之あるべ  
 くと存じ候○  
 女郎よてと御  
 力落し○潰し  
 の利と阿魔ッ  
 の方々が宜敷  
 喋の方殺して  
 ○捨り殺して  
 か仕舞成さる  
 とも僕と何

昨夜以來愛妾の處へ潜り込珍々鴨  
 鍋爪彈都々一乃樂みを盡し居候て  
 只今歸宅致し鼻左衛門より言上す  
 る處を聞に貴君儀今朝より蟻が餌  
 を運ぶやうに度々御出相成候由何  
 等の御用向ふ候哉若志旨い儲け口  
 にても之あり候は是非半口乗て  
 貫る度候間一寸相伺ひ候尤も僕乃

ども存せす候  
○此古蹟鼻禰  
と輕少あがら  
○何か御用あ  
り氣な素振あ  
て○無駄足も  
運動も成て宜  
とと申しなが  
ら○若しや彼  
の事でも親父  
又知れたかと  
吃驚○馬面の

身に取て都合乃惡事なれば強て  
聞度は御座あ候也

◎同返事

筆で虚言を書き口で法螺を吹よは  
縦ひ税金え入ぬに致せ昨夜以來愛  
妾の宅で沈々鴨鍋の樂みなどは  
誠に片腹の痛い事にて若し事實を  
知らぬ者が之を聞けば本當乃事と

人と云へば貴  
君よ相違之れ  
なく○手紙が  
書無ければ足  
をお運び下さ  
れ度○用向さ  
へ知れを夫で  
宜敷○今朝よ  
り足の皮が摺  
りたるほど幾  
も参堂○何處  
を歩附て居ら

思ひ違へ候故其様ふ口から出任せ  
の法螺を以來御慎み相成候方然る  
べく存じ候と先づ一本参り置き扱  
今朝より是非御面談致し度と御苦  
勞様にも度々参上致し候え別儀に  
之ふく豫て貴君が翠玉を抵當とし  
て金櫃惣兵衛より大枚金貳圓を借  
られ候一件最早期限も過去候由

れしか何時も  
藻脱の空よて  
○か陰よて大  
變腹を減し候  
○貴君と野ノ  
氣だが人間並  
の者と左様な  
譯よと参り難  
く○實と此間  
の指一件○  
女房の耳へ這  
入を又候角を

若し今日限り元利共返濟なさに於  
ては止を得ぞ抵當を引取べしとの  
事にて大きな剪刀を持って保笑人の  
僕へ断りに参り候よ付其事を一寸  
御通知致さ度よ、参上致し候儀に  
御坐候就ては今夕まで右笑書面  
の金額並びよ利子共先方へ御返し  
之あさに於ては大切の翠玉とナヨ

出し候ゆゑ○  
危兄もチト本  
氣よ成て○越  
中禰の紐を堅  
くべて○其様  
な海鼠のやう  
みグニヤく  
せずよ○瓢丹  
で餘とと貴君  
の事よ之ある  
べく○運びが  
附なけれを附

キリと御切取成され候は必定よ付  
御用心之あり度此段御變事旁御怪  
答申し及ひ候也  
◎商業の盛衰を問合せる文  
其後は貧乏神に追駈られア、詰ら  
ふいと欠伸をする暇はあれど餘計  
ふ暇を遺して御尋ね申す時あく追  
々魁の道切に相成候得とも危家皆



ぬよて宜敷ゆ  
る虚言を突ぬ  
やう願度○  
面と面とを合  
しても只此事  
を申す丈も御  
座候○阿房多  
羅坊主の言草  
よと御座なく  
候得とも○人  
情とペラく  
と漉く相成○

々々様例もに達者で目出度存じ奉り  
候然らば豫て新聞紙上よて百も御  
承知二百も御合点よ之あるべく候  
得ども當地の商業と云ふたら夫は  
く實に早や話よも書よも書ふ  
い次第にて品物を賣ても皆泥坊の  
やうな奴ばツめりて一文の錢も拂  
えど去として只品物を積て見て居た

借たらば貰ッ  
た様に思ひ○  
働いても飯と  
食す○市中と  
ヒツツリとし  
て化物でも出  
想な有様○奉  
公人との店先  
居睡り計り致  
し居り○毎日  
只々欠伸で日  
を送り○生馬

計りては腹も脹れど何方へ何轉ん  
ても迪も旨い汁は吸ない有様ゆゑ  
此分てモウ二二年も押て参れば人  
間の乾物が出来て一山百文の大安  
賣に相成べくと存じ候就てえ御地  
は矢張太陽様と米の飯が附て廻り  
候哉若し太陽様と米の飯が附て廻  
り候はゞ迂生も此方の店を身代限

の目を引て抜  
度も生馬これ  
なく相場も  
猫の眼玉の如  
くクルく  
變る計りよて  
少しも定まら  
ず○七面鳥の  
如く色々又相  
成○是でと逆  
も旨い酒も飲  
す○金持と握

りよして葉書郵便の化物では無け  
れど裸体と道中として貴家へ嚙り  
付叩き出される迄えドシく食潰  
し度候間御地景氣の善惡を至急御  
通知下され度此段葉書を以て相伺  
ひ候也  
◎同返事  
一枚の葉書ペラくと到達致し候

ツたきり○貧  
乏人乞鬼道  
の飛脚の如く  
○御地と如何  
少しと面黒話  
しも有之候哉  
○少々胸掘定  
これあり候よ  
付○事明細よ  
白状を乞ふ○  
何事が湧出し  
たかど存じ候

よ付何の御用ひと一見致し候處僅  
か二錢出せば郵便の切手が買へる  
ものを吝嗇坊主義でタツタ一枚の  
葉書へ長たらとい文句を瞿栗粒を  
振蒔たやうに御認め相成候事故顯  
徴鏡ふらでは十分よ讀事が出来  
候得共讀る處丈を拾ひ讀致し候得  
ば何やら當地の盛衰を御聞合せの

得<sup>ま</sup>を○尻<sup>へ</sup>のや  
うな事を糞<sup>くそ</sup>の  
固<sup>かた</sup>糞<sup>くそ</sup>ほどよ○  
針<sup>はり</sup>程<sup>ほど</sup>の事を棒<sup>ぼう</sup>  
ほどよ御<sup>ご</sup>才<sup>さい</sup>越<sup>こ</sup>  
○此<sup>こ</sup>位<sup>ゐ</sup>な事<sup>こと</sup>よ  
膽<sup>い</sup>玉<sup>たま</sup>を潰<sup>つぶ</sup>すや  
うでと○若<sup>も</sup>し  
飢<sup>う</sup>餓<sup>ご</sup>の時<sup>とき</sup>よな  
れを死<sup>し</sup>出<sup>で</sup>の案<sup>あん</sup>  
内<sup>うち</sup>者<sup>もの</sup>と第一<sup>だいいち</sup>貴<sup>き</sup>  
君<sup>きみ</sup>よ之<sup>これ</sup>あるべ

様<sup>さま</sup>よ存<sup>ぞん</sup>ぜられ候<sup>こう</sup>然<sup>しか</sup>る處<sup>ところ</sup>當<sup>あた</sup>地<sup>ち</sup>え昔<sup>むかし</sup>よ  
も今<sup>いま</sup>も別<sup>べつ</sup>段<sup>だん</sup>變<sup>か</sup>りたる事<sup>こと</sup>あ<sup>ら</sup>く金<sup>かね</sup>持<sup>もち</sup>の  
人<sup>ひと</sup>は金<sup>かね</sup>を持<sup>もち</sup>てフクくと世<sup>よ</sup>渡<sup>わた</sup>りを  
致<sup>いた</sup>さ貧<sup>ひん</sup>乏<sup>ぼう</sup>者<sup>もの</sup>は金<sup>かね</sup>がなくてヒービ  
泣<sup>な</sup>かぬら相<sup>あ</sup>暮<sup>く</sup>る居<sup>い</sup>候<sup>こう</sup>ま<sup>ま</sup>での事<sup>こと</sup>に  
御<sup>ご</sup>座<sup>ざ</sup>候<sup>こう</sup>間<sup>ま</sup>右<sup>みぎ</sup>誤<sup>ご</sup>笑<sup>しょう</sup>痴<sup>ち</sup>相<sup>あ</sup>成<sup>なり</sup>度<sup>た</sup>此<sup>こ</sup>段<sup>だん</sup>餘<sup>あま</sup>計<sup>けい</sup>  
な手<sup>て</sup>間<sup>ま</sup>潰<sup>つぶ</sup>しに付<sup>つ</sup>郵<sup>ゆう</sup>便<sup>べん</sup>稅<sup>ぜい</sup>先<sup>ま</sup>拂<sup>はら</sup>を以<sup>も</sup>て  
御<sup>ご</sup>怪<sup>かい</sup>答<sup>た</sup>申<sup>ま</sup>し上<sup>あ</sup>候<sup>こう</sup>也

く○僕<sup>ぼく</sup>と新<sup>しん</sup>聞<sup>き</sup>  
屋<sup>や</sup>の種<sup>ね</sup>取<sup>と</sup>よと  
之<sup>これ</sup>れなく○盛<sup>さか</sup>  
んな時<sup>とき</sup>もあれ  
を衰<sup>おとろ</sup>へた時<sup>とき</sup>も  
あり○僕<sup>ぼく</sup>と不<sup>ふ</sup>  
景<sup>けい</sup>氣<sup>き</sup>と何<sup>なに</sup>の  
事<sup>こと</sup>やら知<sup>し</sup>らず  
○金<sup>かね</sup>と無<sup>な</sup>くて  
も酒<sup>さけ</sup>さへ飲<sup>の</sup>む  
と云<sup>い</sup>ふ都<sup>と</sup>々<sup>々</sup>一<sup>い</sup>  
を御<sup>ご</sup>承<sup>しょう</sup>知<sup>ち</sup>之<sup>これ</sup>れ

古<sup>こ</sup>誤<sup>ご</sup>に馬<sup>うま</sup>は死<sup>し</sup>て骨<sup>ほね</sup>を遺<sup>のこ</sup>し鹿<sup>か</sup>は死<sup>し</sup>て  
角<sup>かく</sup>を遺<sup>のこ</sup>すと申<sup>ま</sup>す事<sup>こと</sup>之<sup>これ</sup>あり候<sup>こう</sup>故<sup>ゆ</sup>迂<sup>う</sup>生<sup>せい</sup>  
も何<sup>なに</sup>か人<sup>ひと</sup>並<sup>なら</sup>外<sup>ほか</sup>た業<sup>わざ</sup>をして笑<sup>わら</sup>ひを後<sup>あと</sup>  
世<sup>よ</sup>へ遺<sup>のこ</sup>し度<sup>た</sup>もの存<sup>ぞん</sup>じ米<sup>こめ</sup>の高<sup>たか</sup>い乃<sup>なり</sup>  
と幸<sup>さい</sup>ひ食<sup>く</sup>物<sup>ぶつ</sup>も食<sup>く</sup>ばに腦<sup>のう</sup>味<sup>み</sup>噌<sup>そう</sup>を絞<sup>しぼ</sup>り  
握<sup>にぎ</sup>り翠<sup>すい</sup>玉<sup>たま</sup>をして種<sup>たね</sup>々<sup>々</sup>様<sup>さま</sup>々<sup>々</sup>相<sup>あ</sup>考<sup>かん</sup>考<sup>こう</sup>へ  
候<sup>こう</sup>未<sup>み</sup>終<sup>しゅう</sup>よ此<sup>こ</sup>品<sup>ひん</sup>を發<sup>はつ</sup>明<sup>めい</sup>致<sup>いた</sup>さ候<sup>こう</sup>扱<sup>さく</sup>此<sup>こ</sup>發<sup>はつ</sup>

◎發<sup>はつ</sup>明<sup>めい</sup>品<sup>ひん</sup>の見<sup>み</sup>木<sup>ぼく</sup>を送<sup>おく</sup>る文<sup>ぶん</sup>

なく候哉 ○ 當  
時と珍らしい物  
が流行りて  
七日七夜雪院  
又鼻を撮んで  
相考へ ○ 坊主  
よ成れを丸儲  
けとと存ヒ候  
得とも ○ ヤツ  
トの事此様  
物を發明し ○  
意笑條例よ依

明品は當今の如く米の  
高い時と臆  
へ引ひけ口を塞いで居  
る道具にて  
其名を臆釣鍵と申し候  
是は貧乏人  
よして救助米の途切た  
とき杯には  
随分調法を品のやう存  
ぜられ候間  
見木として二三本娛笑  
覽よ供へ候  
若し誤試験の上成程感  
心だと思召  
候はよ十分勉強して御  
賣弘め下さ

り ○ 專賣特許  
を願ひ出候處  
首尾能く別付  
られ ○ 先づ笑  
表と附て ○ 手  
ッ取り早く金  
よ致し度 ○ 買  
人さへあれを  
金も儲かり ○  
君も半口乗て  
差上候故 ○ 自  
分ながら利口

れ度尤も初めて臆へ引掛  
る時は少  
々痛い様には候得ども其  
處は米代  
を出さばに濟事ゆゑ少  
し痛い位は  
我慢をせねばならぬと誤  
笑痴下さ  
るべく候也  
◎ 同返事  
貧乏人の臆釣鍵誤發明の  
由にて見  
本を御遣はし相成候得  
ども其使方

な男だと感心  
致し候○馬鹿  
み附る薬と無  
いと申しな  
がら○蚯蚓の  
ノタクリ書  
て○何やら譯  
の分らない物  
を御遣とし和  
成○何して食  
ふ物も候哉○  
購釋を聞なけ

がサツパリ相分らば候故家内中の  
者が獅ッ鼻を突合せて相考へ居候  
處へ出過者の小僧長松が飛て來て  
行成下腮へ引掛志に魚とえ違ひ生  
た人間の事なればキヤツとばかり  
に目を廻志己よ三時三十三分三秒  
時間を過去候得ども今以て木氣の  
沙汰に相成らば大眼玉を引繰返一

れを○定めし  
正氣の沙汰よ  
てと之ある間  
敷○誠ま御挨拶  
援の仕方よ相  
困り候○尤も  
盲目よ見せた  
ら譽るかも知  
れず○茶人を  
尋ねて御賣附  
成さるべく○  
小生義此頃懸

た切よて誠に相困り候間危殿より  
醫者を御頼みの上大至急尻よ帆を  
掛て御駈附下され度此段誤依頼  
よび候也  
◎病後人に送る文  
過日來拙者病氣の節は誤苦勞様  
も毎日御出下され下手な鴨鶏  
屋が家鴨を損ふツたやうにモウ

病<sup>ま</sup>よて酒<sup>さけ</sup>を  
 飲<sup>の</sup>み園<sup>の</sup>子<sup>こ</sup>を食<sup>を</sup>  
 ながら打<sup>う</sup>臥<sup>お</sup>し  
 居<sup>い</sup>候<sup>け</sup>處<sup>ところ</sup>○風<sup>かぜ</sup>の  
 神<sup>かみ</sup>と喧<sup>けん</sup>嘩<sup>か</sup>を致<sup>いた</sup>  
 し○僕<sup>わが</sup>が寝<sup>ね</sup>て  
 居<sup>い</sup>ると米<sup>こめ</sup>の相<sup>あ</sup>  
 場<sup>ば</sup>も狂<sup>くる</sup>ひ○別<sup>わか</sup>  
 嬪<sup>ひん</sup>よ苦<sup>くる</sup>勞<sup>らう</sup>をさ  
 せて濟<sup>よ</sup>ぬゆゑ  
 ○漸<sup>お</sup>く床<sup>とこ</sup>の中<sup>なか</sup>  
 から潜<sup>ひそ</sup>り出<sup>で</sup>し

死<sup>し</sup>だ未<sup>ま</sup>だ死<sup>し</sup>ぬ  
 揉<sup>も</sup>で居<sup>い</sup>られ候<sup>け</sup>處<sup>ところ</sup>生<sup>な</sup>憎<sup>にく</sup>藥<sup>くすり</sup>が利<sup>き</sup>て緩<sup>ゆる</sup>の  
 井<sup>い</sup>ふら二人<sup>ふにん</sup>前<sup>まへ</sup>位<sup>ゐ</sup>はペロリお茶<sup>ちや</sup>の粉<sup>こな</sup>  
 て食<sup>く</sup>て仕<sup>し</sup>舞<sup>ま</sup>やうな達<sup>たつ</sup>者<sup>もの</sup>に相<sup>あ</sup>成<sup>なり</sup>候<sup>け</sup>間<sup>ま</sup>  
 がツカリ御<sup>おん</sup>力<sup>ちから</sup>落<sup>お</sup>し成<sup>な</sup>し下<sup>くだ</sup>され度<sup>たぎ</sup>尤<sup>もつと</sup>  
 も死<sup>し</sup>だ積<sup>つ</sup>りて香<sup>かう</sup>奠<sup>でん</sup>だけ御<sup>おん</sup>遣<sup>つか</sup>し下<sup>くだ</sup>さ  
 れ候<sup>け</sup>はゞ以<sup>も</sup>來<sup>らい</sup>貴<sup>き</sup>君<sup>きみ</sup>を阿<sup>あ</sup>彌<sup>み</sup>陀<sup>だ</sup>様<sup>さま</sup>と崇<sup>あが</sup>  
 め奉<sup>たてまつ</sup>り候<sup>け</sup>也

○今日<sup>こんにち</sup>と馬<sup>うま</sup>車<sup>くるま</sup>  
 の後<sup>あと</sup>おしよ雇<sup>や</sup>  
 れ候<sup>け</sup>位<sup>ゐ</sup>に付<sup>つ</sup>○  
 最<sup>も</sup>早<sup>はや</sup>新<sup>しん</sup>佛<sup>ぶつ</sup>よお  
 成<sup>な</sup>り成<sup>な</sup>されし  
 事<sup>こと</sup>と存<sup>ぞん</sup>じ居<sup>い</sup>候<sup>け</sup>  
 處<sup>ところ</sup>○首<sup>くび</sup>尾<sup>び</sup>悪<sup>わる</sup>く  
 御<sup>ご</sup>平<sup>へい</sup>癒<sup>ゆ</sup>○饑<sup>う</sup>頭<sup>づ</sup>  
 の當<sup>あた</sup>が外<sup>ほか</sup>れ○  
 實<sup>じつ</sup>よがツカリ  
 ○併<sup>ひ</sup>し香<sup>かう</sup>奠<sup>でん</sup>  
 助<sup>すけ</sup>かり○君<sup>きみ</sup>と

●同返事

戲<sup>あそ</sup>君<sup>きみ</sup>儀<sup>ぎ</sup>過<sup>あ</sup>日<sup>ひ</sup>より人<sup>ひと</sup>の疝<sup>ぜん</sup>氣<sup>き</sup>を頭<sup>あたま</sup>痛<sup>いた</sup>に  
 病<sup>やま</sup>で打<sup>ぶ</sup>倒<sup>たお</sup>れられ候<sup>け</sup>に付<sup>つ</sup>ヤレ嬉<sup>うれ</sup>しや  
 穀<sup>こく</sup>潰<sup>つぶ</sup>の頭<sup>あたま</sup>數<sup>かず</sup>が一<sup>ひと</sup>疋<sup>びつ</sup>減<sup>へ</sup>ると存<sup>ぞん</sup>じ居<sup>い</sup>候<sup>け</sup>  
 處<sup>ところ</sup>豈<sup>いか</sup>に料<sup>りょう</sup>らんや吞<sup>の</sup>芝<sup>しば</sup>とも宜<sup>い</sup>藥<sup>くすり</sup>を吞<sup>の</sup>  
 て又<sup>また</sup>候<sup>け</sup>娑<sup>しや</sup>婆<sup>ば</sup>を塞<sup>ふ</sup>がれ候<sup>け</sup>由<sup>よし</sup>扱<sup>あ</sup>々<sup>あ</sup>呆<sup>あ</sup>れ  
 返<sup>かへ</sup>つた譯<sup>わけ</sup>は御<sup>ご</sup>座<sup>ざ</sup>候<sup>け</sup>就<sup>す</sup>ては此<sup>こゝ</sup>度<sup>たび</sup>こゝ  
 定<sup>ま</sup>めし死<sup>し</sup>去<sup>な</sup>られ候<sup>け</sup>事<sup>こと</sup>と鑑<sup>かん</sup>定<sup>てい</sup>致<sup>いた</sup>し候<sup>け</sup>

貧病ゆゑ〇怪  
病も付〇床揚  
とと誤大層な  
申し分〇實も  
お爺茶羅可笑  
き事も御座候  
〇就てと御馳  
走と何日も候  
哉〇僕も食倒  
し〇参り度〇  
此頃と墨玉も  
寒氣も感じて

ゆゑ實は友達の好味を以て棺桶を  
誂へ己よ先方に出来上り居候處其  
鹽梅では先づ當分の中は御不用よ  
之ある可く候得ども併し晩めれ早  
めれ何れ御入用の事と存じ候間代  
金御支拂の上早速御引取下され度  
此段序を以て申し上候也

◎人の安否を問ふ文

梅干の如く相  
成〇墨中とと  
申しながら素  
敵も熱く左な  
がら五右衛門  
の釜入の如く  
よ候處〇貴家  
日乾の儘御暮  
し〇只口の先  
お世辭心かり  
よ目出度存じ

其後は別段用向も無之候ゆゑ膿だ  
とも潰れたともお互に何とも云は  
せ啞同様の交際よて相過候得ども  
危家誤一同相變らば南京米で命を  
繋ぎ何の斯の虫の息よて其日を透  
られ候哉夫よ引替拙宅は御存じの  
通り二年三百六十五日只轉りく  
と寝轉んで居ても食物は澤山よあ

○老意人  
とまだ生て御  
出成され候哉  
○貧乏子澤  
山みて無々御  
困難○拙宅と  
皆々笑ひ顔よ  
て○福の神と  
仲宜く暮し○  
家内安至息災  
延命とと即ち

り又金もシユ玉持て居候ゆる各自  
に贅澤は仕放題にて朝の寐起から  
夜寐るまで鯛の刺身真鯉の生作り  
或は鰻の蒲焼或は鮓或は西洋料理  
或は會席料理あど錢金よ構はぞ珍  
味佳肴にて身体を養ひ候お蔭を以  
て年を取た祖父祖母より生れ立の  
赤ン坊に至るまで揃ひも揃ッて流

此事よ之れあ  
るべく相欣び  
居候間○おぼ  
し召あらし御  
お心下され度  
お嫌なら御勝  
手次第○損書  
這讀○戯書到  
來○片ツ端か  
ら讀盡し候處  
○危論の如く

行風邪の一ツも引ぞ素敵滅法界丈  
夫にて打殺しても死ぬ様よ相暮し  
居候間御安神下され度先は愚弄半  
分御無沙汰尋ねまて草々

◎同返事

奇書拜讀然らば鬼家儀は太閤時代  
より先祖代々評判の貧的にて不斷  
碌々に食ふ物も食ぞよ乾魚然と



○天道様の相  
場が狂ひ○寒  
いやうな熱い  
様な○誠又早  
や變挺來○危  
家ピンシヤン  
と御暮しの由  
○命あつての  
物種なれを○  
此方からも只  
口の先をかき

て御暮し相成候は夫が却つて毒  
用心とあり流行の虎列刺病にも取  
附れどピンシヤンとして汗水タラ  
御働さ成され候由大警此事に  
候且つ手前方に於ても例の通り皆  
々弗函ふ寄掛り公債證書の勘定よ  
草臥て居眠りを致し居り候次第に  
付エヘン憚りながら餘計あ頼みも

のお世辭又目  
出度存じ  
○此兩三日と  
殊の外の好天  
氣よて半風子  
で之無ければ  
ノソく出掛  
度候○此様な  
物を友人より  
シコ玉送り呉  
ひ處○思ふよ

せぬ誤心配は下され間敷候也

◎物品を贈る文

天道様の痲病でも煩はしやつたと  
見へ毎日くチヨビリくと降續  
候にえ御同様退屈の至よ御座候扱  
此燈心の三杯酢は親類の阿魔の邪  
鬼より滅法界に旨いと云ふ觸込に  
て澤山よ送り越候得ども家内の者

人間にんげんの食くらべき  
物ものよと之これある  
間敷まじ○何なんだか  
妙めうな香かほが致いたし  
○若もし腸ちやうかた  
るるでも遣やかし  
てと大た變へんと存ぞん  
じ候間きゆうま○少せうし  
計よりでとない  
残のこらず氣き前まへを  
見みせて差さ上あ候きゆう

え勿な論ろん猫ねこも犬いぬも只ただ香かほを嗅かだ計よりて  
食くふ者もの之これなく去さりとて折せ角かく貫くわんツた物もの  
を掃はき溜ためへ捨する譯わけにも行いぞ甚はだ持も餘あま  
志こころ候きゆう處ところ不ふ圖と思おもひ出だ候きゆうは奇き君くんも蕃たう  
椒からしと甘あまいと云いひ砂さ糖たうを辛からいと云いふや  
うふ阿あ魔まの邪よこ鬼おにも付つけ仲な間まの阿あ魔ま  
乃すなはち邪よこ鬼おにが旨うまいと云いふ物ものふれば定まめ  
一ひと奇き君くんも旨うまめらうと存ぞんじ其その儘ままソ

○君きみと變へん人ひとよ  
付つ○一ひと寸すん誤ご試し  
驗けん○尤もつとも御ご意い  
又また叶かなひ候きゆうとい  
跡あとと自じ腹はらで御ご  
買か成なさるべく  
候きゆう○態たい々々御ご苦く  
勞ろう様さまも○願ねがひ  
みもせぬ事ことを  
○余あま輩たひの家うちを  
豚ぶた小こ家やと間ま違ちがひ

ツクリお譲ゆづり申ま候きゆう間ま御ご遠とほ慮りよなく  
娛ご笑わら味あじ下くだされ候きゆうはゞ本ほん怪かいの至いたりよ  
御ご坐ざ候きゆう也なり頭あたま首くび

◎同返事

日ひ々々雨あめ降ふ相あ續つさ候きゆう由よし水みづ撒まの世よ話わ  
ななく誠まことに結むす搦なり至いたりよ御ご座ざ候きゆう扱あ不ふ  
斷たに人ひとの物ものを借かりてさへ返かへさぬ危あや君くん  
が何なにだか勿な休やすらしく解かい釋しやくを附つて御ご

へられ○使の  
者こそ宜面の  
皮○掃溜と方  
角を取違へ○  
如何も下さる  
物なら夏のお  
小袖もとと云  
ひながら○是  
と實も閉口○  
君と至体食な  
い代物○有が

遣いよ付道理ころ昨夜は夢見が惡  
かつたと今よ至ッて心附候小生は  
素より下戸だの上戸だのと肩書の  
附た偏屈人よは之なく手元よ有さ  
へすれば牡丹餅も食ひ酒も飲み親  
父の膳も嚙り身代も食遣す様か男  
なれども燈心の三杯酢丈は食はど  
嫌ひに付態々御贈り下され候得ど

たくも何とも  
御座なく候○  
ア、馬鹿く  
しい餘計な手  
間潰しを致し  
候○昨年以來  
一度ならず二  
度ならず三々  
又相願候○七  
重の膝を六重  
又折り○然る

も是え眞平御免と首を横よ振て其  
儘手附ぞ御變却申志上候也  
◎頼み置し事を問合せる文  
昨日え参堂御馳走も何よも頂戴致  
さぞ有難くも何とも存じ奉らば候  
陳れば其節苦しい時の神頼み主義  
にて日頃頭を下る事の大嫌ひな僕  
が角兵衛獅子の如く倒逆立を志て

み足下之唾  
でも成られた  
か○其後之膿  
だとも潰れた  
とも○鉄砲玉  
の片便り○屁  
玉の消て跡な  
きが如く○是  
れが越中禰  
相成候て之誠  
又相困り候間

願ひ置候○的周旋の儀は如何の御  
座候哉元來僕は極々正直な男にて  
取へば團子と串とを出して何方を  
と袋とを並べて何方を遣ふかと云  
へば煎餅乃方を貰う様な氣質ゆへ  
約束を違へる事は混吝財嫌ひあり  
又貴兄も僕が平生面の皮の厚さ加

○何卒頼鼻揮  
を必て御取掛  
り○貴君と庇  
意氣でも僕と  
中へ庇意氣も  
て之なく○  
先方へ御掛合  
下され候哉  
ウも行た具似  
をして未だお  
出下されぬ様

減は能々御呑込の事と存じ奉り候  
然れば此度の○一件も無論成就す  
る事とは自分一人て保証致し居候  
得ども若し萬々二ペケを食ひ候て  
は死だ休よして香奠でも募集する  
か左も無くば留人を拵へて置いて首  
でも縊る真似をするか何にしても  
茶番狂言の下稽古をする様な大亂

み思これ候○  
虚言を突すよ  
本當願ひ度  
○嫌なら嫌と  
男らしく御斷  
り下され○蛇  
の生殺しとと  
此事御座候  
○何分シツカ  
リお狸申しヤ  
ス○其代りお

痴戯と相成候間嫌ても應ても此事  
情を御舎の上昨日願ひ置候通り從  
弟同士の夫婦て十圓(重縁)丈御周旋  
下され度若し十圓が六ヶ敷ければ  
貧乏人の泣言て九圓ても宜敷候間  
是非とも無駄骨を折て貰ひ度此段  
酒亞突に搦へ込で御依頼申し上候  
尤も若志抵當を御望みならば親讓

禮之何よ致  
さす○親父よ  
知れぬ様極内  
で御返事○瘦  
馬を追使ふ様  
よせき立候○  
毎くの誤催促  
ホニマアお  
氣の短かい人  
と存じ候○短  
氣と損氣と申

りの火の車貧棒等を差上候ても苦  
志めらば候に付此旨申し添候也

◎同返事

昨日は出拔よ御飛込相成例の長尻  
にて帯を立てても下駄へ灸を据ても  
御歸り相成らば候え近頃大閉口致  
候然らば其砌三遍廻ッてお仕辭  
の上御泣付相成候金策の儀早速鐵

して○何どか  
グズく胡麻  
化して居る中  
又貴君の方で  
嫌よなるなら  
うと存じ○先  
々打遣り放し  
の姿よ致し居  
候處○迎もガ  
メと御斷念○  
お待なされる

乃草鞋を穿て處々方々相尋ね候得  
ども何分にも當節の人間は皆利口  
よて縁も由緒も無い者に踏倒され  
るよりは寧ろの事溝の中よ放り氣  
候方却つて奇麗淡泊として居て宜  
と申す者ばかりゆゑ十圓處の其百  
分ノ一只の壹錢も貸て呉る者之無  
くに付金よ圓がないと御斷念の上

ならむ當り成  
されぬが宜し  
○十の中九分  
九厘九毛まで  
と先づ六ヶ敷  
○マアく左  
様よ誤笑知を  
願ひませうか  
い○或人の狂  
句よ光陰之矢  
より疾く腰

首を縊るとも腹を切とも御勝手次  
第に成さるべく此段七面倒あがら  
厄介拂ひの爲め御返事申し上候也  
金言

◎賀筵よ人を招く文

月日の立は實に鉄砲玉の飛より疾  
く私お竹馬よ乗て餓鬼大將とあり  
腕白小僧と二所よ暴れ廻りしはッ

と弓○年寄の  
世味言ながら  
死でも宜やう  
な者の死の  
嫌よて○目出  
度今日まで生  
死○先々是が  
人間の仕合せ  
と申すもの○  
平作の言草で  
之無々れは是

イ二三年跡のやうに思ひ又花嫁の  
顔を見て盆槍と涎を流したるはッ  
イ二三日前の様よ思ひ候得ども此  
頃は己に年寄の仲間入り悴は電  
氣燈親父と云ひ孫は糞祖父と云ひ  
婆アよえ鼻を撮れ嫁には邪魔よせ  
られイヤバヤ活智のふい有様に相  
成候は今更愚痴を溢しても火事跡

でも若い時よ  
と小角力の一  
二番も取た奴  
めで御座りま  
す○婆アの勸  
みより○チト  
散財口ながら  
○強飯でも蒸  
して一人で食  
ふかと存じ候  
得ども○只祝

のポンプながら若い時に能く稼い  
て金を溜して置ば今は氣樂な御隠居  
様になつて居るものと後悔臍を  
噛遣し候併しなから殺す神あれば  
助けける神あり棄る紙あれば拾ッて  
歩く紙屑拾ひありて何の斯の是ま  
で生延暦を繰て見れば今年が丁度  
六十一歳よ相成候間チト舊弊なが

ッて下さる物  
 が欲さよ○少  
 しく山氣で○  
 山海の珍味と  
 申して山の芋  
 と鯉の乾物と  
 を御馳走致し  
 候間○若し食  
 事がお嫌ひな  
 ら御出下され  
 度○尤も懐へ

ら賀の祝ひを催ふし平生誤懇意の  
 お方に麥飯と味噌汁と一杯ツ、御  
 馳走致し度候に付夕飯過まだ腹の  
 減ぬ頃より椀と茶碗を首に掛けて  
 ウぞやお慈悲よ旦那様と頭を下て  
 門口まで御出下され度此段大糞發  
 せ御案内申し上候也  
 但し孫子の腰巾着は眞平御免

竹の皮などを  
 御持参と堅く  
 御斷り申候○  
 老の練言正よ  
 拜笑いたし候  
 ○叱らを老怠  
 人儀○何を寐  
 惚られ候か○  
 お年の上とと  
 申しながら○  
 随分白痴た御

と蒙り度此段念の爲に申し添  
 候也  
 ◎同返事  
 世の諺に憎まれ者は世に弾めれる  
 と云ひ又馬鹿の長生と云ふ事之あ  
 り候得ども成程昔志の人ば旨い事  
 を云った者だと眞底腹の中めら感  
 心致し候ト申すは外の儀よ之なく



振舞○若し新  
開屋の種取が  
開嚙り候とい  
○此節と少し  
狂印と承ま  
り候へども是  
と本氣の沙汰  
も候哉○濁酒  
もても只なら  
を嫌とと申さ  
ず○ニツ返事

老怠人は常々死損ひの爺と綽号を  
取り最早棺桶へ片足を突込て居る  
がら賀の祝ひを催ふすふと、途方  
途徹もない人間並乃熱を吹れ、毫碌  
の名弘めを致され候え御四足御子  
息馬鹿藏君の身も取り如何計の心  
細事よ之有べくと存じ候元來人間  
と申す者は五十年が定命よて其上

で駈付け申す  
べきの處○馬  
のやうな人間  
が大勢ろろッ  
て駈込み申す  
べく○御馳走  
と何々の御料  
理も候哉夫か  
らして先づ承  
とり度○御馳  
走次第よて参

マグレ當りて六十の聲を聞た者は  
六十の三ツ子と云ッてオギヤア  
と泣て居るの左も無くば年寄の冷  
水と云ふ戯則に依て水を吞て居る  
の何れに致せ己に娑婆の縁は放れ  
て居者に候得ば麥飯と味噌汁の御  
糞發は御見合の上老怠人の冥土へ  
御立出の節握り飯にして數陀袋へ

らぬ事も之な  
く○空腹を抱  
へて歸るやう  
でと相困り候  
間○賀筵とあ  
るからよと餅  
も赤飯も御用  
意○僕と酒を  
飲す候故牡丹  
餅を頂戴致し  
度○若し酔排

御捨込み相成候方却ッて誤都合宜  
敷ゆるべくと存じ候間今日の御案  
内は先づ御取消願度候トは申す  
もの、折角御馳走を食せると仰し  
やる者を無氣よお断り申すも不人  
情なり且は腹の虫よ對して戯務相  
立老候間御申じ越の如く後刻空腹  
を抱て家内一同外に犬猫まで連れて

ツた節よと喧  
嘩をおツ始め  
る哉も相知が  
たく○拳骨の  
お相伴を食と  
ぬやうよ御支  
度○跡とお目  
よ掛ッて威張  
べくし○お祝  
ひ代物の跡よ  
り持参○驚の

食倒しよ参り候間米櫃の底に音の  
せぬやう十分に御支度下され度就  
ては是も世間の戯理合にて仕方お  
さ事ゆゑ聊か御祝ひの驗までよ潑  
草紙一枚進呈致し候若し水ッ鼻を  
防ぐ爲に鼻の穴乃栓よ御用ゐ下さ  
れ候はゞ大驚々々

◎忘年会を催ふす文

聲と蟬の聲と  
 代り蟬の聲と  
 鈴の聲と代り  
 鈴虫の聲と借  
 金取の聲と相  
 成○大三十日  
 前と例でも苦  
 しい者どと兼  
 て覚悟の事よ  
 候得とも○誠  
 又命が縮まる

本年も最早鈍詰りと相成嘸々御マ  
 ゴ附の事と察し入候然らば當春以  
 來随分根氣よく遊びに實を入れ一  
 月に一度位は嫌々ながら稼ぎ候得  
 ども何分貧乏神の後楯よては旨い  
 酒も飲み難く終に今日の切端よ差  
 迫り四方八方より借金取に責られ  
 二進も三進も身動さぬ出来候よ

かと思これ○  
 先酒でもヒン  
 飲で○借金取  
 と吐鳴り競を  
 致し○同勢御  
 慕り○無茶苦  
 茶よ暴れ回り  
 て○此段危意  
 を得度○仰せ  
 の如く今年も  
 最早三日と五

付ては糞焼序に暴年怪を遣ひて  
 思切り乱暴を相働る度と存じ候處  
 危兄え如何に無座候哉牛は牛連類  
 を以て集るの理屈に依て此段一寸  
 御笑談申し上候也  
 ◎同返事  
 誤懶示の通り一年の光陰は人魂の  
 浮羅く飛び如くに過行る最早行

時四十五分よ  
相成○御同前  
よマゴ附候○  
暴年怪之至極  
賛成○直様野  
其倉連中よ笑  
談○決して嫌  
とと申さず○  
掘み合の稽古  
仕舞○今より  
拳骨を振廻し

ても笑ッても僅よ二三日と相成御  
同様に貧棒を振廻し兼候就ては糞  
焼の暴年怪御催ふしの由僕も兩肌  
と脱て怠賛成越中憤鼻禪を質よ置  
ても是非お仲間入を致志度候間頭  
を揃へる場所日限等相定り候はゞ  
葉書郵便の先揃よて誤呆痴下され  
度此段誤怪答および候也

て相樂み申し  
候

滑稽普通用文章終

◎滑稽記事論説文

骨皮道人著

此本と誠よ面白い本よて凡ての洒落が新しくて巻を翻せば  
笑ひ出し夫れ之く捧腹絶倒と言えうか雷笑失體と申さう  
か實に誠よ真よ本統よお臍が移轉致して可笑くてく々、  
堪らない本なり其可笑さど申すものと落語家でも俄師でも  
逆も追着譯でとない汽車よ後推しても推道ない三合處か干  
舍も避ける事と印紙を貼て保證するなり乃で面白い丈で無  
い滑稽文章を學ぶの諸君片時も離せぬ妙々本なり

滑稽用文語類終

明治二十三年八月廿三日印刷  
同二十三年八月廿五日出版

定價拾錢

東京市淺草區御藏前片町二十番地

著者 西森武城

大阪市東區備後町四丁目廿六番屋敷

發行者 梅原忠藏

大阪市東區高麗橋五丁目四十五番屋敷

印刷者 大垣彌太郎



圖書出版社會藏板

同	同	同	同	同	同	同
東區備後町四丁目	南區心齋橋北詰	東區淡路町三丁目	東區南久太郎町四丁目	東區北久太郎町四丁目	東區安土町四丁目	大阪市東區備後町四丁目
梅原龜七	中村芳松	金川善兵衛	濱本伊三郎	岡本仙助	積善館	吉岡平助

